

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第30総会期主題
平和を実現する人々は幸いである一マタイによる福音書5章9節

- 日本YWCAビジョン2015
(1) 非核・非暴力による平和を構築する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
・女性と子どもの権利をまもり
・パレスチナYWCAの活動を支援する
(2) 若い女性のリーダーシップを養成する

YWCA 12

DEC.2010

発行所 日本YWCA
〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03・3264・0661
【駿河台オフィス】
〒101-0062千代田区神田駿河台1-8-11
東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 / FAX 03・3292・6122
E-mail. office-japan@ywca.or.jp
編集発行人 俣野尚子
振替 00170-7-23723 (毎月1日発行)
定価1部 150円
年間購読料2,200円(送料込)
www.ywca.or.jp

小さい者として 生まれたキリスト

東海林路得子
矯風会ステップハウス所長



今の日本の状況は、政治に希望が見出せないどころか、国の周辺で何か不安な事件ばかり起こっている。

沖繩の問題は、民意よりも米国の意思を尊重して進められている。失業・貧困・殺傷事件や性暴力などが、毎日と言っているほど報じられている。これまでにない気候の不安定さは、地球の未来を予測しているかのようにも思われる。こうした現実の中で暮らしていると、私たちは将来どうなるのかと不安になってしまふ。また、子どもや孫たちが今後どのような社会に住むことになるのかと、心配ばかり募る。子どもたちの周囲の環境を見れば、私が子どもの頃とは異なり、夕方遅くまで近所の子どもたちと大声をあげて遊んだり、大人の見えないところでの自由な遊びもできない。オートバイ、車、すごいスピードで走ってくる自転車が絶えず、一人で外に出すこともできないのが都会の生活だ。小さい時から大人の監視の目の中で育つ子どもは、常に不安感に襲われ、自分で先の見えない人生を生きようという意欲が乏しくなるのは当然であろう。もし災害が起きたら、もし原発に事故が起きたら、もし、もしと不安は絶えることがないのが現在の状況だ。

とりわけ信頼できる親との関係で育つことができなかった子どもはどうなるだろうか？ 現在そんな子どもたちが大人になってきていると感じている。特に愛された経験のない若い人が、寂しさから男性と同居したり結婚したりして妊娠した結果男性に捨てられ、出産後は経済的な貧しさに加えて、自分の自由にならないうる子どもに対応できず、相談するすべも人もない時どうなるだろうか。自分の心や身体に詰め込まれている怒りやうっ憤が噴出し、激しく子どもに向かうのではないだろうかと思像する。

今年、私が働くシエルターにティーンズが目立った。父親の性暴力から逃げ、繁華街で座っているところを保護されたり、母親の暴力や厳しい管理から逃れ、外にいるところを保護され、ひどいうつ状態で入院し

てから私たちのところに送られたり、すでに出産間際の妊婦さんも何人かいた。みんな自分の将来のことを本当に心配しているのだから言えず、一歩前に出ることもできないでいる。いわゆるDV被害者は、もちろん心の奥底には深い傷を抱え込んでいるものの、日時を経るにつれ、問題を徐々に解決しながら元気を回復して社会に出て行くが、何らかの虐待や性被害を受けてきた人々は、恐怖や不安が強く、半歩足を踏み出すのも躊躇している。その上、目に見える傷や病気とは違い、すぐに結果が出ないことから、支援者の判断から居場所を転々と変えられ、だんだん自信を失う結果を招いている。毎日頭が痛かったり、眠れなかったり、買い物にも行けなかったりしている一方で、元気に食べたり働いたりしている人がどんなに羨ましく思えるだろうかと思像できる。そしてますます自分は駄目だ、生きていても仕方がないと思つてはいないか。

来所するほとんどの人たちは、来る前に「死にたい、死にたい」と何回も思ったが、実行して失敗した人たちがであった。周囲にはこんな物があふれているのに、なぜ自分だけこんなな生活をしなければならぬのかという思いは、本当に深いと思う。それだけに、私たちににとっては、彼女たちがとりあえず生きていてくれるだけで、「今日も生きているのね。ありがとう」という気持ちになる。なぜ自分は生きていて、なぜ生きなければならぬのかという重い問いの日々の中で生きることが大変だ。そんな中でアルコール依存になったり、性行為依存になったり、薬物依存になったり、精神的な病を招いたりしてしまっているのだ。

小さい時からの虐待経験や親がDVだったりすると、毎日が不安で学校に行っても授業に集中できないためか、オールだったという少女たちが多い。それでも学校は救いだったためか、学校の先生に聞くと「とても明るく過ごしている。問題はない」という。そんな子どもたちが、たとえ元気がなくなったとしても、どう

やって一人で生きていけるのだろうか。「現代のマッチ売りの少女」は貧困だけでなく、虐待による精神的被害と性虐待(性を売らなければ生きられないから)、そして成績中心主義による差別など、何重もの苦痛と将来の不安の中で生きざるを得なくなっている。

このような現実を見た時、単純に「クリスマス」だからと言って喜ぶ気持ちにもなれない。一体クリスマスはどこにおられるのか？

私は、「もっとも小さいものの中に神がいる」という言葉がとても気になる。一般的に「小さいもの」を教会では救済の対象としてしまっているのではないかとと思う。実は、キリスト自身が「小さいもの」として生まれたということが、馬小屋でのイエスが意味していることではないかと思う。

私たちは、3人の博士のように(それほどではないかもしれないが)豊かである。そして暗い闇の中で「希望」を求めてさまよっている。しかし、求め続けた時に導かれるところは、結局馬小屋の飼葉桶の中にあるイエス、すなわち、今日における「もっとも小さいもの」の中におられるということではないか。私たちは自分の周囲にいる「もっとも小さいもの」の中に神がいることを確認し、その人の存在に敬意を払い、共に生きてほしいと、ひざまずいて願わなければならぬ。

私はシエルターに滞在する彼女たちにより、これまで励まされて生きてきた。希望は高いところにあるのではなく、実は彼女たちの中にあることを知らされてきた。そして私たちの力ではなく、彼女たちのうちに働くキリストが、いつかは彼女たちを立ち上がらせてくださるに違いないと希望を持ち続けることで、私自身もキリストと出会った喜びを感じることができるようになった。キリストの降誕の喜びがすべての人々にあるように!!

新たな連帯を めざして

鹿野幸枝

去る10月4日から3日間、韓国・済州島で開かれた第9回日韓URM協議会に参加しました。この協議会は、日本YWCAも加盟する日本キリスト教協議会(NCCJ)のURM(都市農村宣教)委員会と、韓国基督教協議会(NCCK)正義と平和委員会との共催で2年ごとに日・韓交互に開催されるもので、東アジアと世界の平和実現に向けて日韓両国の教会とキリスト教団体が取り組むべき課題、教会と社会に対する私たちの責任を明らかにし、解決に向けて協働することを目的に開かれています。今年には特に、韓国強制併合100年の節目に当たり、「東アジアの平和と共生―韓国強制併合100年にあたって」を主題に、新たな連帯をめざして真剣な討議がなされました。

1910年8月に締結された「韓国併合に関する条約」は日本の武力による脅しによるものであり、それは国際法上も締結された時から無効であるということを確認した上で、日本政府には今なお残されている植民地支配の責任を果たさなければならぬことを要求すると共に、教会は日韓の次世代のための正しい近現代史教育をより積極的に実施し、課題解決に向けて、市民運動と協働することなどを盛り込んだ共同声明(*)を採択して閉会。

会場となった済州島は、韓国最大のリゾートとして、また韓国ドラマや映画の撮影地として日本でも人気が高く、大勢の観光客が訪れていますが、実は、戦後東西冷戦構造が最も悲惨な形で現れたところなのです。日本の敗戦による植民地解放後、進駐してきたアメリカ軍と韓国軍・警察による共産主義者掃討は熾烈を極め、2002年に盧武鉉大統領(当時)が正式に謝罪するまで、長い間、犠牲者を追悼することも許されなかったのです。また、島内全域には太平洋戦争末期に日本軍がつくった数々の軍事施設の大部分がもとのまま残されており、そこに今、海軍基地が建設されようとしています。沖繩・普天間基地の国外移転が取りざたされるたび、済州島の人たちは、どんな思いでこのニュースを聞くでしょう。東アジアの平和実現に向けて、より本質的、大局的な議論が必要とす。

(大阪YWCA会員) *共同声明の全文はNCCURM委員会ホームページに掲載。

日韓YWCAカンファレンス 16年ぶりに開催

日程：2010年10月7日(木)～10日(日)
会場：韓国YWCA、ソウルYWCA
主題：平和に向けた日韓YWCA共同課題



韓国併合100年の今年、日本から11名、韓国から22名が参加し、16年ぶりに第7回日韓YWCAカンファレンスを開催しました。2つの歴史研究(1920年代の日韓のキリスト者社会運動の歴史的な役割とその存在の意味、1920年～1945年の歴史)を通して日韓YWCA関係を理解すると共に、今後の日韓YWCAの平和構築の協働について話し合い、共に折りの時をもって心を合わせました。

今、私の手元には、石井摩耶子前会長からいただいた1975年12月号の日本YWCA機関紙のコピーがある。35年前の機関紙には、初の日韓YWCAカンファレンス開催の報告が載っている。石井さんを含む日本からの参加者5名は、「出来る時に出来ることをして友好と理解を深めたいと願う」韓国に向かった。当時の日本や韓国社会の情勢や関係などを鑑みれば大変な一歩であったであろう。最終的には「どのように困難があっても」「両国YWCAに課せられた共通の課題を力を合わせて解決したい」と心に決め帰国した」とある。その後、数年ごとの開催を経て、16年前にカンファレンスは休止になった。

胸に活動を続けてきた日本YWCAだが、ナショナルYWCAとしての、侵略戦争に加担したことの反省を表現出来たのは最近のことである。昨年の全国会員総会で『アジア太平洋戦争の謝罪と未来に向けての決意表明文』を採択した。なぜこのカンファレンスが16年ぶりに再開出来たのか。その経緯からネットワークの重要性が浮かび上がる。実は、シニアのカンファレンスより先にユースのカンファレンスが再開したのは、今から6年前。時を同じくして日本YWCA100周年を記念して、30年以上の歴史を持っていた「ひろしまを考える旅」に韓国や中国のYWCAからの参加者を招待するという試みを開始した。

草の根の信頼関係構築と平和につながるこの二つの大切なプログラムを通じて、日韓YWCAのユースたちは、確実につながり、顔の見える関係になっていく。今夏は、この二つのプログラムが合同で開催され、韓国からのユースたちは、夏の広島を共に旅した。両YWCAのユースたちの楽しそう、そして確実に信頼関係を深めた展開に、両YWCAシニアたちの「Yコッコ」が触発されたであろうか。韓国からうれしい呼びかけがあり、日本から韓国との信頼関係構築に想いのある方々が訪問することになったのである。今回の日本からの参加者たちは、各地域YWCAで既に韓国の地域YWCAとの姉妹提携を結んで共に活

動を行っている方々でもあった。ナショナルレベルだけではなく、地域YWCA間でも草の根の交流を重ねている。機関紙695(2010年8・9月合併)号には、鈴木伶子さんによる、これまでの韓国との関わりについての記事が載っている。侵略に加担した行為は取り消せない。しかし、その反省があったからこそ、さまざまな方が良心を持って長い間活動を続けてきた。ナショナルや地域YWCA、ユース間、そして個人同士で。これまで、時には細くなっても糸を紡いできた。そしてそれを理解してくれた韓国の方々がいる。今、その人々の想いが新しい時代を担うユースという仲間を得て花開いているのだと思う。今回のカンファレンスでは、今後も両YWCA間のカンファレンスを継続したいと、韓国YWCA会長よりありがたい提案が出され、日韓の今後の友好と世界平和に向けた協働を約束した。

テジョン 大田YWCA

大田市は、ソウルから新幹線で南に約1時間程行ったところにある韓国第3の都市。大田YWCAの、DV被害者のためのシェルター「女性憩いの家」＝写真＝は、市の中心からかなり離れた丘の中腹にひっそり建つ地下1階地上2階の建物。1年に100人余りを保護し、常時25人ほどの母子が滞在する。滞在期間は3カ月以上が半数を超える。大田YWCA事務所に併設された家庭内暴力相談所で行われている加害者のための訓練コースには、裁判所からカウンセリングやリハビリの訓練を受けることを命じられた加害者の夫が参加している。



ソウルYWCA

最初に訪ねた多文化移住女性センターは、韓国への移住女性への支援と、その女性たちを多文化講師として養成し、母国の文化を学校や市民センターなどで紹介し平等な多文化共生社会を目指すNGO。多文化講師はモンゴル、インドネシア、中国、日本など現在9カ国。講師となった女性たちは「自分の子どもがのびのびと暮らせる社会を目指して活動している」と、支援を受けるだけの立場から自分の力で社会に発信する場を得たことに誇りを思っているとのこと。その後、ソウルYWCA永登浦人材開発センター＝写真＝を訪問。女性の再就職支援のため、パソコンや家の内装など幅広い職業訓練講座を実施している。

ローカルYWCA訪問

日本からの参加者はグループに分かれ、韓国の4つのローカルYWCAを訪問し、交流を深めました。その一端をご紹介します。

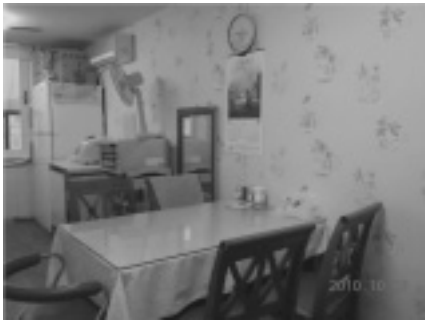
フサン 釜山YWCA

釜山はソウルに次ぐ韓国第2の都市で、海に面しており、韓国最大の港を持つ。釜山YWCAは釜山駅より約10分の場所の表通りに立地。会員7500人。プログラム参加者年間40万人。生協を持ち、食と環境の問題に取り組んでいることは、韓国の56のローカルYWCAの中でも特徴的で、特に青少年のための環境教育や食育への取り組みに力を入れている。釜山YWCAの地下の生協＝写真＝の横には食堂があり、有機野菜を使った韓国家庭料理を出しており、この食堂はYWCA会員だけでなく、地域の人たちも利用する。また、ケータリングも行っており、容器持参で料理も販売してくれるとのことだった。



クァンジュ 光州YWCA

光州YWCAは会員6000人。家出青少年の支援活動の施設(宿泊施設・カウンセリング室・学習室・トレーニング室)＝写真＝と青少年の性教育プログラム施設を見学した。これらのプログラムは、市行政からの委託を受けて実施されており、参加者は学校などからプログラムに参加し教育を受ける。また、光州YMCA90周年行事・晩餐会に参加。5・18国立墓地を参拝し、光州事件当時投獄された経験もありその後支援活動をされた曹亜羅会長と李愛親総幹事の墓に献花した。



「歴史ゼミナール」から

徐正敏・延世大学教授の講演「1920年代日韓キリスト教の歴史状況と社会運動」への、日本側応答要旨を紹介いたします。

◆徐正敏教授による日韓キリスト教関係史についての緻密な実証に基づく包括的な展望に対して、私は、1919年の三一独立運動、23年の関東大震災時の在日朝鮮人虐殺事件、30年代の皇民化政策、45年日本敗戦時の「一億総懺悔」運動、の4点への日本のキリスト者の対応について述べ、応答したい。◆1919年の日本YWCA夏期修養会の席上、三一運動で官憲の犠牲となった朝鮮キリスト教会慰問献金を募った時、朝鮮人女子留学生が立ち上がり、「我が同胞はこのお金を喜ぶだ

12月1日は世界エイズデーです

世界YWCAは、10年以上にわたりHIVとAIDSを最優先課題とし、HIVの蔓延が女性や少女にもたらす影響についての広範な知識を深めてきました。現在、世界の70カ国以上でHIV関連のプログラムが展開されています。その一部を紹介します。

■タイYWCA：パートナーへの感染予防に取り組む



タイYWCAの健康衛生リーダー育成トレーニングに参加する若者たち

アジア・エイズ委員会は、少なくとも750万人の男性が定期的な買春していると推定しています。こうした男性の多くには恋人や妻がいるため、彼女たちをHIV感染の危機にさらすことになります。タイをはじめとするアジアの国々では、既婚女性が新規感染者の中で最も大きな割合を占めており、何百万もの

カップルがHIVや性感染症（STI）に対する効果的な予防策を必要としています。

この状況に対応するため、タイYWCAは、各県の保健局と協力して村の保健衛生リーダーとなる100人の若者を訓練しています。リーダーたちは、性と生殖に関する健康と権利（SRHR）について訓練を受け、STIやHIVの効果的な感染防止法や家族計画について学んでいます。このプログラムを経験することで若い男女は自尊心を高め、地域でHIVとAIDSに積極的に対応するためのリーダーシップスキルを身につけることができます。

■ペルーYWCA：HIVと共に生きる女性と連携する

2007年ペルーYWCAは、リマの低所得層の若い女性たちを対象に、就職支援のパソコン授業を開始し、この機会を利用してHIVと共に生きる女性たちに手を差し伸べました。ペルーYWCA総幹事であるシルバンナ・アヤイポマは次のように語っています。「HIVに感染した女性やHIVの影響が出始めている女性が、偏見や差別を心配せずに安全な場所であるYWCAで成長し、技術を身につけることが大切です。ペルーYWCAを訪れるHIVと共に生きる女性の数は日々増加しています。私たちのプロジェクトに彼女たちが参加することは、他の学生たちがHIVやAIDSに関するタブーを乗り越える一助となっています。それと同時に、差別、抗レトロウィルス薬の入手困難、自分や子どもたちのよりよい将来を保証する教育機会の欠如といった、HIVと共に生きる女性が直面する苦難について私たちは学んでいます」。

プロジェクトの第2段階で実施される自尊心とセクシュアリティについてのワークショップは、HIVと共に生きる女性たちのスキルと知識をもとに作成され、第1段階からの参加者たちもメンターとして関わっています。

■アルバニアYWCA：社会的に弱い立場にいる人々に手を差し伸べる

アルバニアYWCAは、国内で最も社会から置き去りにされているグループであるロマおよびジプシーと呼ばれる人々や、農村地域の人々にHIVに関する教育を実施しています。ドニカ・ゴダイ総幹事は「教育が受けられず極度の貧困状態にあるロマの少女たちは、売春や人身売買の標的となりやすいのです。彼らはHIVについての情報を持たず、危険度の高い性行為がもたらす感染のリスクに気づいていません」と説明しています。HIVとSTIについての認識を高めるために、アルバニアYWCAはこのような男女、特に若い女性を対象とした訓練とグループディスカッションを実施し、また、同世代の仲間と一緒にAIDSや生命の大切さを考える若者たち（ピアエデュケーター）や地方自治体スタッフを訓練しています。さらに他のNGOと協力してこのプログラムを国中に広めることを計画しています。ドニカ総幹事は、プログラムの影響は大きく「女性たちはHIVについてもっと学びたいと思うようになり、生殖に関する健康、特に性と生殖に関する権利に関心を持つようになりました」と語っています。

（翻訳：日本YWCA「コモン・コンサーン」翻訳チーム）

世界YWCA機関紙「コモン・コンサーン」日本語版144号より抜粋

るうか？ 否、独立が遅れば遅れるほど不利益が高まるからである」と演説した。その報告記事は、日本YWCA機関誌『女子青年界』にはまったく載っておらず、日本YWCAの指導者たちは、彼女の必死の訴えを無視したのである。

◆1923年秋の『女子青年界』震災特集号は、6千人を超える朝鮮人が住民に虐殺された事実にはまったく触れていない。河井道子幹事が同紙で朝鮮人・中国人への酷い行為に言及したのは翌年のことだった。韓国YWCAからの震災見舞いの手紙には、同胞への虐待の悲劇に、キリスト教徒として「詫びる」心情を示してほしいとの訴えがあったが、日本YWCAが応答の手紙を送った記録はない。

日本基督教婦人矯風会の指導者久布白落実も、1928年の同機関誌に、世界宣教会議に出席した折、朝鮮女性から震災時の朝鮮人虐殺に日本のキリスト教会が沈黙を守ったことを遺憾とし、せめて一言謝罪の言葉を聞きたかったとの発言があり、

衝撃を受けたと記している。

◆新教の最大教派である日本基督教会は1917年大会で、神社が純然たる宗教であり、神社参拝奨励は帝国憲法に抵触し、信教の自由を妨害すると宣言した。しかし30年代に入ると神社参拝強制に強い抗議もせず沈黙し、15年戦争の中で政府の政策にすり寄っていった。小教派や外国人宣教師の中には果敢な抵抗を行い、ひどい迫害を受ける人々もあったが、多くの一般市民は冷淡であった。

◆1945年の敗戦時の天皇による詔勅のラジオ放送を、日本のキリスト者の多くは好意的に受け止め、天皇制の精神構造の根深さは、キリスト者の場合も例外ではなかった。矢内原忠雄ですら、天皇への尊敬と愛情を吐露し、忠君愛国は日本の美德であると訴えた。賀川豊彦は新内閣参与としてキリスト教界の指導者を糾合して、「一億総懺悔運動」を推進した。誰に対しても懺悔するのかわいさげは、神でも、侵略したアジアの人々でもなく、天皇に対してであった。帝国議会でも「敗戦責任」を問う議論も提起されたが、「一億総懺悔論」に押し切られ、天皇の戦争責任はまったく問題にされなかった。

以上のキリスト者の対応には、国家権力を最高の価値として易々と信じ、国家権力を監視するという民主主義の精神が決定的に欠如していた近代日本人の問題性が露呈していた。この反省は、帝国主義国日本の他民族支配と侵略戦争への贖罪を欠いたまま戦後を過ごしてきた現代の私たちの植民地主義的メンタリティの問題でもある。

歴史を直視することなしに、未来の平和はつくれないと切に思う。

日本YWCA前会長 石井摩耶子

種

「いずこの家にも
伝うるためとて
めでたき音すれ
天よりくだりぬ」(讚美歌 101)

この讚美歌には、美しいエピソードがあります。16世紀の宗教改革者マルティン・ルターは、クリスマスの夜、森から切ってきた樅の木の前子どもたちを座らせ、自分で作詞したこの歌を歌ってプレゼントにしたといわれます。貧しくて何も買ってやれなかったからでした。「いずこの家にもめでたき音すれ」。目には見えないけれど、何と素晴らしい天からの贈り物。父親の歌声に耳を傾ける子どもたちの愛らしい姿が、目に浮かびます。

悲惨な戦争の中にあっても、「クリスマス停戦」が時として行われ、敵味方の区別なく、互いに、クリスマス・キャロルを歌い合うという記事を読んだことがあります。クリスマスを想う時、人はなぜ、戦いをやめることができるのでしょうか。

貧しい小さな姿をとってこの世に生まれ、最後は十字架の上の死で生涯を終えられたイエスさま。しかしそれは、世界中すべての人々に、生きるために最も大切なことを伝える愛の贈り物でした。殺し合いは、もはや、無意味なのです。心から メリー・クリスマス！

寺島順子 (日本YWCA運営委員)

My Story Her Story



私が湘南YWCAの会員となったきっかけは、YWCAバザーへの参加でした。それまでは、聖書の会には参加していましたが、会員の方々の年齢層が高く、私には感心を持ちにくい社会問題が活動の中心でしたので近づき難い存在でした。

当時の私は「子どものテレビの会 (FCT)」に属し、子どもへのテレビの影響、テレビとの接し方などを勉強していました。その会も資金不足に悩まされており、資金かせぎをとYWCAのバザーへの参加をお願いしたところ、心よく受け入れて下さり、感謝でした。バザーのあと片づけをしていると、ご高齢の方々が、いそいそとトイレの掃除や靴箱のぞうきんがけをされていました。

そんな方々の中に橋本恭子さんがおられました。バザー会場での彼女は全体を見守り、売り場のあちこちに気配りし、多くの方とニコニコと話をされていました。私たちの売り場にも声をかけて下さり、それだけで皆うれい気持ちになりました。

橋本さんは、湘南YWCA初代会長の西田琴さんと共に、会館を持たないYWCAで活躍され、現在のYWCAの基礎を築かれた方でした。彼女は町の人とも気さくにおつき合いされ、市役所・図書館・教会・俳句の会…どこへ行っても親しい友人がおられました。その一人の葬儀屋さんからは、今でもバザーの時にテントをお借りしています。

私は橋本さんとの出会いからいつのまにかYWCAの会員になりました。今度は私が町に出て、いろいろな人と気さくにおつき合いをし、一人でもYWCA会員に連なる人を増やせたら、橋本さんも天国でニコリしてくださることでしょ。

湘南YWCA 松山恭子



松山 YWCA

創立25周年 「ナスカの地上絵」を再現!

世界遺産・古代ペルーの



2010年度は、松山YWCA創立25周年、キララ理科実験工作教室開校10周年を迎えました。そこで、いつもとは異なる記念行事を企画しました。2009年3月に小柴昌俊科学教育グランプリを受賞した「ナスカの地上絵を再現する」を、全国で実践されている九州産業大学 諫見泰彦工学部准教授に、松山での実践を依頼し、2007年3月に同賞を受賞した松山YWCAとの共同企画が10月9日に実現することになりました。

当日会場は、松山東雲中学・高等学校にご協力いただき、諫見研究室のスタッフ18名、YMCAやYWCAのボランティアなど、たくさんの方々に支えていただきました。今回、世界遺産の古代ペルーの遺跡「ナスカの地上絵」ハチドリを実物の80%の大きさに拡大して運動場に描く計画でした。

が、雨天のため体育館での実践となりました。

参加者は小中学生等54名で、画びょうと糸を使って、中心点から放射状に拡大を繰り返して、約2時間で実物の22%の、縦21メートル横14メートルのハチドリが完成した時には、拍手がわき起こりました。さらに、体育館2階から鑑賞した参加者からは、「大きい」「すごい」と歓声

が上がりました。参加者全員で感動を共有できる体験学習となりました。今回の企画で、キララ理科実験工作教室の取り組みを多くの方に知っていただき、興味を



本の紹介

『反戦のともしび 第二次世界大戦に抵抗したアメリカの若者たち』

ラリー・ガラ、レナ・メイ・ガラ編著、師井裕一監訳 2,800円



本書は、第二次世界大戦下の米国で良心に従って兵役を拒否し、長い時は5年間も刑務所で服役した6千人の中の10人の青年たちの証言集です。刑務所での暴力や人種差別、ダニやシラミ、酷い食事や苛酷な労働にも屈せずに、ハンガーストライキなどの非暴力抵抗を続け、粘り強く人権の回復を獲得していった彼等の姿から、私は一人ひとりの非暴力抵抗が現実になり力となり変化をつくり出せる事実を教えられ、勇気を与えられました。6年前、熊本YWCAが40周年記念に米国への平和の旅を実施、編著者夫妻と出会って本書を贈られ、翻訳・出版が実現したことは、うれしい限りです。

(石井摩耶子)

呉 YWCA

点訳・音訳の活動を通して

すべての人が幸せに生きる社会の実現を目指すYWCAの理念のもと、視覚障がい者に必要な情報を提供したいと、呉YWCAでは、点訳は1968年から、音訳は1978年から活動を始め、それぞれ40年、30年以上の歴史を持つ。

点訳は、かつては点訳カレンダーを全国に届けていたが、メンバーの高齢化と減少で、現在は大相撲の点訳回覧と音訳郵送物の点字ラベルを作成している。音訳は、8年前から呉市身体障害者センターの「音訳奉仕員養成講座」の講師を担当し、受講生から幾人かがグループに加わり、現在は20人前後のメンバーによって活動が続いている。

主な音訳物は、「市政だより」「社協だより」「ボランティア情報」「水道だより」「バスだより」等の広報だが、楽しい読み物も、「呉YWCA小さな本棚」「中国新聞読者投稿欄」も加え、毎月26名に届けている。そのほか、個人の希望により、「JR時刻表」「音訳書誌目録」「ラジオ番組表」「取扱説明書・月刊誌・小説等も音訳している。また、現在、広島県立盲学校

高校生の大学受験のための参考書の音訳依頼にも応じている。四字熟語では、聴きやすい読みと共に、漢字がきちんと理解できる説明にも苦心した。視覚障がい者が漢字を理解する困難さを改めて痛感した。

音訳の録音図書もテープからCDの時代に移行し、録音方法もパソコンに音声専用ソフトを入れて録音・編集する。読みの熟練と共に、パソコン機器操作の研修も積み重ねている。これらの活動によって自分自身が豊かに育てられていることに感謝し、仲間と共に支え合って活動できることを喜びとしながら歩んでいる。

呉YWCA 長尾真理子
「ご協力ありがとうございます」
賛助費
青木恵子 小川和子 仁木三智子
木部由美 高橋登美 古西正子
安倍愛子
国際協力募金
日本キリスト改革派東京恩寵教会
「オリブの木募金」
吉田智里 木部由美 木部みつる
事業支援寄付
エリザベス・クラーク 金剛静慧
田中美智子 鹿野幸枝 吉村千恵
侯野尚子 湘南YWCA
東京YWCA
(2010年10月20日現在 敬称略)

2010年10月17日

アメリカ合衆国大統領
バラク・フセイン・オバマ・ジュニア様

日本YWCA
会長 侯野尚子
総幹事 西原美香子

米国の臨界前核実験に抗議します

米国政府が9月15日に核爆発を伴わない臨界前核実験を米西部ネバダ州の地下核実験場で実施していたことが10月12日に報じられました。私たち日本YWCAは、米国政府が2006年8月以来24回目の臨界前核実験を行ったことに対し、強く抗議します。

2009年4月5日のバラク・オバマ大統領のプラハでの演説は、全世界に、米国が世界の平和と安全のために核兵器廃絶を追求し、全世界的な核実験の禁止を信念を持って明言するとともに、米国による包括的核実験禁止条約の批准を直ちに、積極的に推進することを宣言するものでした。この演説は、核兵器のない世界のビジョンの実現を心待ちにしていた世界中の人たちの心を熱くし、世界を核廃絶に向けて動かししました。オバマ大統領のノーベル平和賞の受賞は、米国政府に対してプラハでの演説の実行を約束させるものであり、米国政府の発言撤回を抑止するものであったと私たちは考えます。しかし、米国政府による今回の臨界前核実験の実施は、世界中の人々に対して大きな失望を与えたと共に、地球環境にも取り返しのつかないダメージを与えたことは言うまでもありません。

日本YWCAは、米国政府によるヒロシマ・ナガサキへの原爆投下による被爆の経験から、核と人間は共存できないことを確信し、あらゆる核実験の中止と核兵器の廃絶を求めて活動すると共に、核の脅威を次世代に伝えようと「ひろしまを考える旅」を1971年以来毎年実施してきました。また戦後半世紀の経験から、私たちは核兵器の保有が、国際緊張をもたらし、世界の平和構築を妨げていることを熟知しています。

日本YWCAは、米国政府が世界の人々の核兵器廃絶を願う声を真摯に受け止め、すべての核保有国と対話し、いのちの尊厳に立ち返って次世代への責任として核兵器の保有を放棄し、真の平和構築のために英知を集めて働くことを切に求めます。